

使徒の働き16章1－5節 「同労者テモテ」

1A 思いを一つにする人 1－2

1B 困難な宣教 1

2B 弟子 1

3B 信仰の継承 1

4B 評判の良い人 2

2A 平和の架け橋 3－4

1B ユダヤ人への宣教 3

2B 異邦人との一致 4

3A 堅実な成長 5

本文

使徒の働き 16 章を見ていきます。私たちは今、パウロの宣教旅行の第二回目の部分に入っていきます。前回のことを思い出してください。「15:36 さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」とパウロはバルナバを誘いました。けれども、助手について激しい議論になりました。マルコをバルナバが助手として連れて行くといったのです。パウロは、パンフィリアで一行から離れていった者を連れて行くことはできないと判断しましたが、バルナバは、マルコが自分の従兄弟であるし、彼に再度の機会を与えたかったのだと思います。けれども意見の対立が起こって、バルナバはマルコを連れてキプロスに行きます。キプロスは第一回目の宣教旅行で初めに足を踏み入れた島です。

パウロは、エルサレムから来た指導者シラスを連れて、「15:41 シリアおよびキリキアを通り、諸教会を力づけた。」とあります。第二次宣教旅行の始まりです。第一回目の時は、ピシディアのアンティオキアに行き、それからイコニオン、リステラ、デルベへと向かいました。デルベから東に行けば、キリキア地方に入り、そしてさらに東に行けばシリア地方に行きます。けれども、信じた兄弟たちを力づけるために、デルベからリステラ、イコニオン、アンティオキアへと戻って行きました。そして、船に乗ってシリアのアンティオキアに戻りました。今回は、パウロとシラスはそのまま西に動き、パウロの出身タルソのあるキリキア地方に行き、それからデルベ、リステラへと向かいます。

キリキア地方のタルソのところから、ルカオニア地方に行くには、三千^{メートル}級のタウロス山脈を渡らなければいけません。唯一、そこにある峠が、キリキアの峽門と呼ばれます。かつては、ギリシアのアレクサンドロス大王がペルシアと戦うための遠征に行く時に、反対方向にここを通り、「我ここを通れり」という碑文を残しています。パウロもそれを見たに違いありません。温暖で湿度のある地中海の気候から、一気に10度以上下がる高地に入ります。カパドキアの地方です。そこから西

へずっと行くと、デルベに行きます。シリアのアンティオキアからデルベまで、今の車道を通っても、450 ㎞はある長い道です。

私たち夫婦は、2019 年のトルコの旅で、アンティオキアからバスで、タルソに行き、それからカパドキアに行きました。イスラエルとの違いは、距離がとてつもなく長いことです。そこを、主に徒歩で動いたのだろうと思われます。いろいろな難に出くわしたことをパウロは、コリント第二で話しています。しかし、祈る時間はたくさん持てたでしょう。主を思い巡らす時もたくさん与えられていたことでしょう。今は、いろんな雑音のために見えなくなっている霊的な世界、また奇跡が、そういった主との交わりの中で与えられていたのではないか？ということです。

ところで、この第二次宣教旅行で、パウロは前もって計画していなかったことが二つ起こります。その一つは、その宣教地でこれからの宣教のための同労者が与えられることです。それがテモテです。そしてもう一つは、今のトルコ、小アジアを超えたヨーロッパへの宣教が始まることです。次回、6 節以降でじっくりと学びます。このことを持って異邦人への宣教が決定的になり、キリスト教の世界を変えたといっても過言ではありません。しかし、パウロが前もって予定を立てたり、計画したことではありませんでした。私たちの神は、予定の変更を迫る方であることが分かります。

1A 思いを一つにする人 1-2

1B 困難な宣教 1

¹ それからパウロはデルベに、そしてリステラに行った。すると、そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ人女性の子で、父親はギリシア人であった。

デルベからリステラに入りました。リステラでは、以前、足なえの人を立たせたことによって、バルナバとパウロが神々に祀られようとしたところであり、その後、アンティオキアとイコニオンから来たユダヤ人の扇動によって、石打ちにあったところです。そんな困難があった時に、かけがえのない実が結ばれていました。それが、テモテが信仰を持っていたことです。パウロは、コリント第一で、「16:9 実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています、反対者も大勢いるからです。」と書きました。困難な中にある時に、ここから何か良いものが、出てくるのだろうか？と意気消沈してしまうかもしれませんが、主は真実な方です。

2B 弟子 1

そして、テモテは「弟子」とあります。使徒の働きにも、「弟子」という言葉が多く出てきますが、主イエスが、弟子としていきなさいと命じておられましたね。「マタ 28:19-20a ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、20a わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」ただ信じるだけでなく、バプテスマを受け、イエスを主として従っていくこと。そして、主から命じられたことを守

り行おうとすることです。そこまで行って、初めてイエスの命令に従っていることになります。

3B 信仰の継承 1

テモテは、この箇所を始め新約聖書に、28 回登場する名前です。それほど、存在感はないと思います。その理由は、テモテ自身が語っている部分がないからです。しかし、彼が 28 回も登場するということから、彼がいかにパウロたちの宣教に大きな部分を占めていたかが分かります。

パウロにとって、「信仰による、真のわが子テモテへ(Ⅰテモ 1:2)」と、テモテへの第一の手紙の書き出しで言っています。パウロにとって、信仰へと導き、育て、養っていった存在です。そして、パウロにとってかけがえのない同労者になっていきます。彼が宣教地を離れなければいけなかった時も、その場で働きを続けています。アンティオキアから共に旅をしているシラスに並んで、テモテの姿が出てきます。例えば、ベレアで迫害と危害がパウロに迫ったので、「17:14 シラスとテモテはベレアにとどまった。」とあります。また、パウロに代わってテモテがコリントの教会に遣わされました(Ⅰコリ 4:17)。パウロが自分の手紙を書くにあたって、テモテの名も共同の執筆者として書いています。第二コリント、ピリピ、コロサイ、テサロニケの第一と第二、そしてピレモンへの手紙です。

ピリピ人への手紙に、なぜパウロがテモテが大きな存在だったかが分かります。「2:20 テモテのような私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、だれもいません。」と言っています。同じ心になっていたのです。パウロは、ピリピの教会の人々に対して、自分の事をさておいて心配していたのですが、そこまで思っている人がテモテ以外にはいなかったのです。同じ働きをしていますが、同じ心や思いになっているということは、ほとんど見出せないと思います。

そして彼は、牧会者であったのですが、彼はまだ非常に若かったのです。それで、テモテへの手紙では、「Ⅰテモ 4:12 年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。」とパウロが励ましています。また、「Ⅱテモ 2:22 あなたは若いときの情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。」若いけれども、主が貴くお用いになっていた器です。主は、若い人々も大いに用いられます。

そして、テモテが、表面的なところではなく、深いところでパウロと心をつなげたのは、彼が幼い時から聖書に親しんでいたということがあるでしょう。テモテへの第二の手紙です。ここ本文では、「信者であるユダヤ人女性の子」であったとありますが、手紙では、「1:5 私はあなたのうちにある、偽りのない信仰を思い起こしています。その信仰は、最初あなたの祖母ロイスと母ユニケのうちに宿ったもので、それがあなたのうちにも宿っていると私は確信しています。」とあります。幼い時から母また祖母から聖書を教えられたことも書かれています(3:15)。

聖書には、若い時からみことばを教えられて、それで、その人は主の教えから離れることはない、

と言っています。「詩 119:9 どのようにして若い人は自分の道を清く保つことができるでしょうか。あなたのみことばのとおり道を守ることです。」「箴 22:6 若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。」

4B 評判の良い人 2

²彼は、リステラとイコニオンの兄弟たちの間で評判の良い人であった。

「テモテ」というのはギリシア語の名前で、「神に賞賛された」という意味です。彼の名前は神に賞賛されていたという意味がありますが、人にも賞賛されていたようです。使徒の働きには、評判の良い人々が出て来ていました。ステパノやピリポのような七人の執事、パウロに手を置いて祈ったアナニアがそうでした。また信者の間ではありませんが、ユダヤ人の間で評判の良い、コルネリウスもいました。

主に用いられる人、働き人が、神だけでなく、人にも良い評判があるようにということは、パウロがテモテへの第一の手紙やテトスへの手紙でも言っていることです。「Ⅰテモ 3:7 また、教会の外の人々にも評判の良い人でなければなりません。嘲られて、悪魔の罠に陥らないようにするためです。」霊の戦いが教会にあるということですね。非難されるところがあると、そこで悪魔が何とかして教会そのものを潰そうとしていく企みがあります。そして、パウロはテモテに対して、信者の模範になりなさいと言いました。「Ⅰテモ 4:12 あなたは、年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。むしろ、ことば、態度、愛、信仰、純潔において信者の模範となりなさい。」

2A 平和の架け橋 3-4

1B ユダヤ人への宣教 3

³パウロは、このテモテを連れて行きたかった。それで、その地方にいるユダヤ人たちのために、彼に割礼を受けさせた。彼の父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。

テモテは、母がユダヤ人だけれども、父がエジプト人というハーフであるという、少し特殊な人でした。そこで、ユダヤ人と異邦人の社会において、少し微妙な立ち位置にいたのでしょう。その中で、パウロがテモテに行かせたのが、割礼です。ユダヤ人のためだと言っています。

15 章において、異邦人の信者に割礼を受けさせるべきであると教えた偽教師たちに真っ向から対峙して、一歩も譲らなかったのがパウロです。けれども、ここではテモテに割礼を受けさせています。15 章における決定は、異邦人の信者が律法のくびきを負わなくて済むようにするためのものであると同時に、ユダヤ人信者との一致の絆を確認するものでした。ユダヤ人が、異邦人と食事をする時に、血の入ったものであるとか、偶像に供えられた肉であるとか、信仰がそこまで強くなく、良心が痛む兄弟たちがいることを踏まえて、愛の配慮の中で、敢えて行わないでいくというも

のでした。ですから、ユダヤ人にとっても安心し、異邦人にも納得のいくものだったのです。

そのような思いから、パウロはテモテに割礼を受けさせたのです。救われるためのものではなく、ユダヤ人に宣教するためのものです。パウロたちは、まずユダヤ人の会堂に入ってそこで福音を語っていました。ユダヤ人は、「母親がユダヤ人なのに、この者は無割礼なのか？」ということで、福音のこと以外で心を悩ませたり、つまづかせたりすることは得策ではないと考えたのです。福音のこと以外のことで、論争や議論を呼び起こすようなことは避けたかったのです。

コリント人への第一の手紙で、パウロは詳しく説明しています。「9:19-20 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。」私たちは、パウロのように、愛という原則から、また福音のために、自分に与えられているキリスト者としての自由を用いて行きたいです。

ところで、テスへの手紙もありますね。テスも、パウロにとって尊い同労者でした。けれども、テスはギリシア人です。ですから、パウロは、そうした異邦人にも、救いのために割礼を受けさせて、ユダヤ教に改宗させようとした者たちには、一步も譲りませんでした。こちらは福音の真理に関わることからです。エルサレムの教会の人たちも、テスを無割礼のまま受け入れているのです。(ガラテヤ 3:2)

2B 異邦人との一致 4

⁴ 彼らは町々を巡り、エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を、守るべきものとして人々に伝えた。

エルサレムの教会で決めたことは、二つの恵みがありました。一つは、異邦人が律法のくびきを負わなくてよいことです。もう一つは、ユダヤ人と異邦人の愛の結びつきです。教会の中で、ユダヤ人と異邦人が、重荷にならずに負うことのできる最低限のものを、ヤコブが提示しました。偶像に供えたもの、血、絞め殺したもの、そして淫らな行いです。

パウロは、異邦人への使徒として召されましたが、彼の情熱には、キリストにあってユダヤ人と異邦人が一つになっている、その交わりがあること、一つになっていることを求めました。決して、ユダヤ人を無視して、異邦人が救われればよいとしているのでは決していないことがよく分かります。その反対で、異邦人に信仰による救いが与えられている恵みを宣べ伝えていながら、異邦人とユダヤ人がキリストにあって一つになる、平和の絆で結ばれることを願っていたことがよく分かります。

ローマ人への手紙は、神の恵みによって、信仰によって義と認められることについてパウロが強調していますが、実は、ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つなのだということも、あまり見えない大きなテーマとしてこの手紙全体に貫かれているのです。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」

3A 堅実な成長 5

⁵こうして諸教会は信仰を強められ、人数も日ごとに増えていった。

これが結果です。信仰が強められて、それで、人々が日ごとに増えていきました。人々が増えて行って、それで信仰が強められたわけではありません。人々の信仰が強められることを求めれば、主が、救われる人々を加えて与えてくださるのです。

パウロが、エペソ人への手紙で語った通りです。「エペ 4:12-16 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。13 私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。14 こうして、私たちはもはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることがなく、15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長するのです。16 キリストによって、からだ全体は、あらゆる節々を支えとして組み合わされ、つなが合わされ、それぞれの部分はその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられることになります。」